

## 1 県下の言語活動の充実を図る取り組みについて

本年度から研究指定校事業として言語活動促進モデル事業を立ち上げ、七つの小・中学校でモデル校として、研究推進に取り組んでいる。ステップアップスクール推進事業の推進校でも、研究テーマを言語活動の充実ということで取り組んでいる学校が多い。

## 2 国語科における言語活動の充実について

- (1) 国語科は、他教科にまたがって言語に関する能力を養うということの中核として位置付けられている。全国学力学習状況調査の「バスケットの作戦についての問題(B問題)」から言えることは、他教科にまたがる形で、言語活動の充実を推進していかねばならないということである。
- (2) 言語活動の充実について、目的と手段を取り違えているところがあるのではないかと。他教科の学習で、言語活動の充実を考えるあまり、それぞれの教科の目標やねらいから国語の方に寄ってきている授業になることがある。
- (3) 「児童の思考力・判断力・表現力等をはぐくむために」言語活動の充実があるのであって、レポートを書かせたり話し合いをさせたりすることが言語活動の充実につながるわけではない。

## 3 子ども自身が「これができた」と実感できる授業の構築を

- (1) 全国学力学習状況調査の児童生徒質問紙から、「国語がすき」と答える児童が、本県は少なく、全国的に見ても低い。子ども自身が授業の中で「これができる」と実感できるものが少ないのではないかと。
- (2) 推敲の授業の中で…
  - ・ 教師の側では「推敲できている」「推敲がまだできていない」という評価はできる。しかし、子ども自身は「ぼくはできている」と自信をもてるような授業になっているだろうか。
  - ・ 相互交流の授業では、推敲の観点が非常に多いのではないかと。自分が書いたものを多岐にわたってチェックしなくてはならないので、授業の最後になるほど反応する子どもの数が減っていくのが気になる。
  - ・ 子どもが、「これができる」「できるようになった」と実感できるように、小さなステップを踏んでいけるよう観点をしぼるとよい。

## 4 研修の成果を広げて

ある地区の発表が違う地区で花開いた、来年どこかの地区で花開く、というように今回の研修内容を広げていってほしい。